

ファミリー

「死んだら終わり、だから生きる」



「外国人の子もたちの心の叫びを知って」と講演する具志アンデルソン飛雄馬さん＝愛知県小牧市で

外国人の子どもを支援 NPO理事長 具志アンデルソン飛雄馬さんが講演

「死んだら終わり、だから生きるんだ」。外国人の子どもを支援する「多文化共生NPO世界人」理事長で、ブラジル出身の日系三世・具志アンデルソン飛雄馬さん(30)＝津市＝が、こんなタイトルの講演会を愛知県小牧市で開いた。具志さんは少年時代、学校や地域に居場所がなく非行に走り、大人になってからも「暴力」から抜けられない生活が続いたという。今、再び前向きに生きようと決意し、自分の生い立ちを語ることで「これからの子どもたちに、同じような過ちを繰り返させたくない」と訴える。
(酒井ゆり)

少年時代の心の傷を語る

具志さんは十一歳の時、サンパウロから家族とともに来日。地元の小学校に通い始めたが、しばらくすると同級生たちの輪に入れてもらえなくなった。「外国人のくせに」「やがて」などと笑われたこともたびたび。「先生の目が届かないトイレや休み時間中は、殴られたり、けられたりが日常茶飯事だった」

そこでも暴力が待っていたが、今度は殴り返した。すると、不思議と仲間が増えていった。「不良は、自分たちも心に傷を抱えている。だから、以前のように外国人だからと言っただけで、差別されるのがなかった」。けんかしている時だけは、生きている充実感が味わえた。

その後、仲間うちで傷害事件が発生。逮捕され、約一カ月後に釈放されたが、その後も生活は変わらなかった。「内心はまじめにならなりたいと思った。でも、なかなか仲間と縁を切ることはできなかった」

◆ ◆ ◆

転機が訪れたのは二十歳の時。子どもが産まれ、真剣に生活を考えていかなければならなくなった。父親の知り合いの社長が営業の仕事を紹介してくれた。頑

張れば、頑張るほど、売り上げが伸び、働いての楽しさを知った。

◆ ◆ ◆

ようやく前向きに頑張ろうと思ったころ、父親が病気で世界。最期は「四十八年間生きてきて、何も楽しいことがなかった」とだけ言い残して。「あまりにも悲しい言葉。また生きる気がなくなった」。荒れた生活に戻り、再び傷害事件を起こして牢の中へ。だが、そこで出会った年上の人に「あんたみたいな若者が、こんなところにいたらあかん」とさとされて、思った。「99%だめな人間でも、1%でも価値があれば生きていけるのだ」と

◆ ◆ ◆

社会に復帰した後は、それまでの仲間とはきっぱり決別。今は三重県内の学校で国際化対応教育指導員として、外国人の子もたちのサポートに尽力している。今回の講演は少年支援のNPOジュヴェニルの活動に協力した。「今でも僕と同じような状況の子もたちがたくさんいる。自分の生い立ちを話すことは苦しいが、こつた子どもたちの気持ちを少しでも分かってもらいたい」と言う。

支援活動の傍ら、大学進学を目指して受験勉強にも励んでいる。外国人の子もたちが、少しでも将来に希望が持てるように。

